

相手を知ってわが振り直せ。世界の忘
年会のさまざまなスタイルを、本書か

ら学んで実施してみてはどうだろうか。
(渡邊欣雄)

椎野若菜 編著 『やもめぐらし—寡婦の文化人類学—』

2007年 明石書店 発行

本書の編者はこれまで「寡婦」に関して「ケニア・ルオ村落社会における寡婦の民族誌的研究」(2003年 東京大学大学院博士論文)を提出し、比較家族史学会秋季研究大会ミニシンポジウム「やもめの処遇」(2003年)、第四〇回日本文化人類学会分科会「配偶者亡きあととの寡婦の処遇」(2006年)、「民博通信 特集 寡婦の現在」(2006年)など一連の企画を行なってきた。さらに編者は第四十一回日本文化人類学会にて「シングルの人類学に向けて」と題し、配偶者と死別した女性にとどまらず、未婚者も含め「シングル」と名づけられた人々についての共同研究を呼びかけている。それゆえ、本書は編者の「シングル研究」の第一部を占める書と位置づけることができよう。

本書は15社会の事例に基づき、結婚制度、慣習、宗教における「やもめ」の処遇について検討したものである。

どの社会にも結婚という制度の下に家族が組織されることは明らかである。さまざまな社会の家族、親族について調査・研究を行なってきた文化人類学者では、各社会における親族体系、婚姻規則の解明から、各社会の親族について普遍的に分析することが可能な常数を発見することを目的としてきた。従来の研究では、夫婦そろった家族を主たる分析対象とし、寡婦は結婚制度の受動的追随者として捨象してきた。そのため、配偶者と死別した女性が、その後親族、家族といかなる関係を継続させながら生きていくのか、ましてや寡婦がとる「戦術」など生き活きとした寡婦像は描かれることはなかった。以上の欠落点を補うべく、本書は寡婦を基点とし結婚制度を別の角度から検討することにより、個別具体的なやもめ像の提示に努めている点が特徴である。また、社会・文化人類学的用語

をはじめて目の当たりにする読者のためにも、主要な分析概念をわかりやすく紹介している。

今日日本では、「負け犬」「おひとりさま」といった新たな範疇が誕生し、「シングル」をいかに生きるかという問題が大きな関心を呼んでいる。本書に収められた15社会のやもめの生き様は、「シングル」について頭の片隅でちらりと考えている読者にも何らかの示唆を与えてくれることであろう。

以下、本書の各章について紹介する。まず、第1部では結婚制度のあり方からやもめの処遇を検討している。渡邊

はやもめ=生存配偶者が、亡夫／妻のキョウダイと優先的に結婚する制度が世界的にみとめられる点をふまえ、「逆縁婚」「順縁婚」の定義を整理した。統いて、ケニア・ルオ社会では、寡婦が家屋の建造、農曆および人生の節目で行なうべき儀礼的性交で「夫」としての男性の役割を必要とするために、代理夫と「テール関係」を結ぶことが一般的であるという。また同じくケニアのキブシギス社会では、一夫多妻制で再婚を認めない制度があるために、やもめの女性が多数いるという。当該社会ではやもめの一形態として女性婚を行なう女性が挙げられる。これは不

妊ないし息子を出産しなかった女性が別の女性を「妻」に迎え、「妻」の性的パートナーとの間に嗣子を出産してもらい、自身は「夫」たる役割を男性同様に果たす結婚形態をとる。他方、オーストリア・ケルンテルン州のある農村の事例では結婚、再婚において当事者の出自は重視されず、結婚が農家の一括した財産の相続が結婚成立の必要条件である。そのため広義のやもめは結婚を果たすため、自立した存在である「農家の主人」を探し結婚、再婚を繰り返してきた。

第2部ではやもめの生活をセクシュアリティの観点から検討している。かつてイタリアの寡婦は「ヴェドヴァ」と称され、女性ながら男性領域である公的な場での活動が許容され、本人の能力について直接的に評価がなされてきた。しかし1970年代以降、女性の結婚、生殖に関する選択権が認められ、社会進出も進んだことから、新たに離婚女性という範疇が誕生し、寡婦範疇は衰退しているという。他方、パプアニューギニアのテワーダ社会では、寡婦は亡夫の靈を避けるため家を離れ、他人との同居を繰り返す。寡婦は亡夫と築いた菜園を管理し続けることができるので、経済的に依存せずに生活で